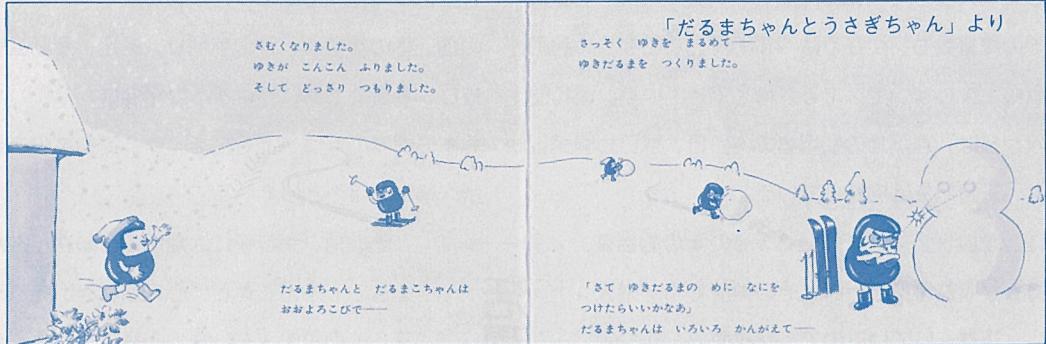


図書館たより

号数 第63号
 発行日 昭和59年1月20日
 編集 島根県立図書館
 発行 松江市内中原町52
 TEL (0852) 22-5725
 印刷 渡部印刷株式会社



親子読書に思う

人間の体の持つ機能の発達は、意外に早い時期に完成され、やがて年を経過するにつれて少しずつ衰退していくものであります。眼は7才ころから、動脈は10才ころから老化が始まっているといわれています。水泳の選手などの記録をみても、20才ごろがピークになっている人が多いのは、ご承知のとおりと思います。

知的機能にかかわる脳の細胞については、20才ころに発達を終了し、その後少しずつこわれていきます。しかし体の他の部分と異なって脳細胞は永久細胞であるので、けっして新しい細胞を作るための細胞分裂をしてくれません。したがって脳細胞の数は、年令が進むにつれてだんだん減少していきます。その数は1日当たり10万個といわれています。人が50才を過ぎるころになると、今聞いたことをすぐ忘れてしまったり、なかなか人の顔が覚えられないようになるのも、このことが原因とされています。ですがそんな人でも、若いころのでき事や知識は意外にあざやかに記憶しているものです。

「少年老い易く学成り難し」といわれているように、若い間にしっかり学習することが、肝心であります。それは年を取ってからの学習に比べ何倍も能

率が上がり、身に付く学習となることになります。けれども人は何らかの形で生涯学習を続けております。それは少しでも自らを高め世の中のためになろうという意欲があるからであり、この学習しようとする意欲が人間性であろうと思います。「本」は学習の友であり、教師であります。いつでも、どこでも自分が求めさえすれば、いろいろなことを教えてくれます。本を読むことによって、人の考え方を知り、喜び、悲しみを味わい、また心の底から感激することもできます。そのため真に自分に役立つ本を選んで読むことが大切であります。

昭和54年にスタートした「親子読書」は県立図書館の行っている読書普及振興活動の一環であります。県内の母さん方にはこの事業を積極的に理解され、本年までに幼稚園・保育園児の80%に当たる親子がこの「親子読書」に参加されました。その結果家庭生活の中で習慣化され、日々親子で読書を続けておられることは、本当に喜ばしいことです。子どもにとって、母の声が耳に響き本の持つ感情が伝わってくる喜びは貴重な体験であります。この喜びが学年期に入ってからの、読書に対する興味に引き継がれていきます。

教育次長 宮下 啓

安来JC児童図書館

安来JC児童図書館は、昭和52年5月5日、“子ども達が本を通して伸び伸びと心の広がりが得られる場”という願いを込めてオープンした。当初は、家庭で不用になった児童書を寄贈してもらったものが大部分で2,500冊余りの蔵書でスタートした。その蔵書数も、現在では7,000冊近くになり、利用者も、少しづつではあるが増えてきている。昭和53年からは、遠隔地の利用者の為に日、祭日も開館し、盆、正月以外は開館している。

しかし、全く予算もなく、その年の担当委員会が収益事業を行い、その浄財で本を購入し、運営をしているので、財政面での苦労が多く、館内の備品、蔵書の充実等、不備な点が多くある。運営資金捻出は今後も一番の課題である。そして、安来青年会議所の一委員会の事業として行っている関係上、専任の司書はなく、青年会議所の事務員が兼任しているので、児童図書館の運営にかかりきりになれないという現状である。

しかし、不備な点を數え上げても切りがない。確かに、設備（建物も含めて）の充実、本の豊かさも、図書館サービスの中の一つではある。恵まれないよりも、恵まれているのに越した事はないのであるが、物質的に恵まれ過ぎている現代、物による豊かさばかりを追い求めている今、施設、蔵書数等、物の豊かさにはばかり視点を当て過ぎてはいないだろうかと痛切に感じている。又私自身、その渦中にいるのではないかという自戒がある。そして、その反省をもとに、物の豊かさにはばかり力を注ぐのではなく、心の豊かさへの働きかけを背伸びをせず、地味に気長に続けていこうと考えている。

そこで、本の世話をしている者の義務として、常

に本に対しての勉強はもちろんの事、昭和55年からは、学生時代の経験を生かし、ストーリーテリングを行っている。その「お話し会」も、最初は一人で行っていたが、3年経た現在では、ボランティアの女性、お母さん方の自発的な参加があり、5人の者が月に2回開催するまでになった。又、その関連の行事として、人形劇を年に3回程度行っている。その他、春の芋植え、秋の芋堀り、遠足、運動会等を催し、今までおもしろい本との出会いがなく、少しも本に興味の無い子ども達を、少しでも本のある場所へ近づけようとしている。

その他、今年春には地域のお母さん方が本を通して子ども達との心のふれあいを深め、又、そのお母さん自身の心を豊かにする事を求めて活動する「親子読書サークル」（代表河野靖子）という自主グループも発足し、我が子だけでなく、一人でも多くの子ども達に「本の楽しみ」を知ってもらいたいと、精力的に活動しておられるのも嬉しい限りである。子供を想う者同志、お互いに協力し合って、一人でも多くの市民の皆さんに、子どもの楽しみの場としての児童図書館の必要性を理解していただきたいと願っている。

財政面に苦慮し、少い本の購入費の中で、少しでも子ども達の心に添う本を…と、頭を悩ませながら、今後も地道に子ども達の側に立った図書館運営をしていきたい。

「おねえさん、あつがりやさむがりが出てくる本ない？」

「ええと……わかった！ 王さまと9人のきょうだいって本でしょ！」

「うん、そう。」

今日も、図書館に子ども達の明るい笑い声がこだましている。

親子読書講演会開催

去る10月19日、県立図書館において「親子読書講演会」が開催されました。講師は、児童文学者であり福音館書店編集部長でもある斎藤惇夫氏で、演題は「心を育てる読書」でした。参会者は、250名の多きにのぼり盛会でした。その講演の要旨を抜いて紹介します。

心を育てる読書

斎藤惇夫（福音館書店編集長）

人間の脳の配線は、3歳ごろまでに60%できてしまい、7歳までに85%、10歳で90%、20歳で100%になり完成します。10歳までに90%というのは驚くべきことで、ほとんど終わってしまうわけです。子どもたちがこの10歳までに読んでもらった本の質によって、大人になった時の読書の方向が決定してしまうといわれています。

1. 子守唄や童唄は最初の文学体験

零歳で子どもが接することばは、お母さん、お父さんや家族のことばです。それと同時に子守唄です。子守唄は、眠るのにふさわしいことばが選んであります。そのことばのリズムと抑揚を聞いて、唄う人の気持ちが通じると、子どもたちの神経が休まり、解放されて眠りに落ちいるのです。子どもが初めて出会う文学です。

その次に童唄です。「かごめかごめ」や「はないちもんめ」や「なぞなぞ」など多くあります。

日本のことばのリズムや日本のことばの美しさを子どもに知ってもらうためには、この豊かな子守唄、童唄を経過させてほしいのです。物語や絵本などを知る前の3歳までの段階で徹底してやっていただきたいというのが願いです。童唄を唄って、その国のことばを体を通して知っていた子どもたちは、やがて詩の世界へ入っていくであろうし、さらには物語の世界にも素直に入っていくのです。

2. 心の成長に欠かせない昔話

昔話は、人々に語られひき継がれてきたものだから舌にのせやすく、聞き手のための文学といつてもよいでしょう。だから子どもたちにとっては非常に

……その記録から……

理解しやすく、そのうえさらに、非常に深いところまで無意識のうちに導かれることがあります。子どもたちが昔話を経過することによって人間にに対する思いを深くし、現実の生活に対して抵抗力ももった大人に育っていくのです。

3. 長く読み継がれた本を

イギリスでは、「3代続いて読み続けられたものが子どもの本」という意識があります。〈ピーターラビット〉をはじめ様々な古典があり、三代以上続いている。それを守りとおしてきた子どものすごさを改めて感じます。日本では、二代目が出ています。「かにむかし」「ぐりとぐら」「いやいやん」などです。

本の奥付をよく見てください。〈ピーターラビット〉は、「今から80年くらい前に出た本だな」ということがわかります。80年間生き残ってきた絵本というの、いったい何人くらいの子どもが読んだのでしょうか。約1千万人の子どもが読んでいます。

4. 読み聞かせで心の遊びを

幼稚園、保育園の児童をもつ子どものお母さんは必ず毎日絵本を読んでやってほしいのです。それ以外に子どもと本を結びつける方法はありません。絵本を読んでやることが、子どもの感受性を育てる第一歩です。そして、読んでやる習慣は、3・4年くらいまでは続けてください。質の高いものをどれだけ豊富に読んでやったかがポイントになります。

本を読んでもらうことは、お母さんの手助けを借りて本の主人公と一緒に化し、本の主人公と一緒にになって、本の世界で自由に遊ぶことです。遊びながら主人公と一緒に様々な経験をすることです。これは絵本であろうと物語の本であろうと全く変わりません。心の遊びをとおして、その中で充分に子どもたちは養分をもらっているのです。ことばにならない世界で感動しているのです。

彫刻家のロダンのことばに「人間にとて最も肝心なことは、まず感じること、感動すること、身ぶるいすること」ということばがあります。この心の積み重ねがやがて豊かな人間に育っていくのです。

県下にひろがる読書会（2）

宍道町来待読書会

○ 所在地 八束郡宍道町来待

○ 代表者 百合沢愛子

○ 会員数 9人

○ 定例日 毎月第2水曜 一湖南荘にて
わたくしたちは、職業も年代もバラバラで、それが個性をもった楽しい仲間です。定例日には連絡しなくとも、だいたい顔が揃います。共通点は本を読みたいという熱い気持でいること、同じ地域に住み、地域を愛していることの二つです。

S51年6月婦人会通信で読書会参加をよびかけ、同年9月から始めました。

その動機は来待小学校児童全員が毎朝始業前の10分間読書をしていることを知ったからです。毎日のつみ重ねは大きく、大人のわたくしたちが、うかうかしてはいられないとあせりを感じました。

当時は、読書とか歌は暇人（働きが悪い者）がするものと敬遠され、困難な中に集ったわたくしたちは、みんなの力で本が読め、お互いから学びあう喜

びを味わい、一層読書の意欲を深くしました。

そして、わたくしたちは自分たちが本を読むだけでなく、ひとりでも多くの人にこの喜びをわけようと常に努力してきました。

○婦人会通信に読書会で読んだ本の紹介や、話し合ったこと、雑談の中からひろった話題を載せる。

○島大、県立図書館より講師を招き、婦人会員によびかけて、いっしょにお話を聞く。

○冬季二か月の読書会や、冬一冊読書をよびかける。

○町中央公民館図書を来待地区へ常置してもらう。

以上ささやかな努力を折々続けて、現在別な読書グループが三つ歩み続けています。これは県立図書館へいつ訪ねても温かく迎えて下さり読書会用図書の恩恵があってのことと、感謝しています。

この度、県立図書館より表彰の栄を受けました。出発以来7年間、一回も休会しないで続いたことにわれながら驚いています。永い歳月には、家族の幸不幸が関わって、女が何かを続けていくことの困難さを知りました。しかし一冊の本に心をよせあった仲間の絆は固く、一層楽しい集いを続けていくつもりです。

NEWS

●図書館協議会開催

去る11月24日集会室において昭和58年度の図書館協議会が開催された。8名の委員を迎えて、昭和58年度事業の報告と昭和59年度予算要求の概要について説明があった。新事業としてのコンピュータ導入と子ども読書事業の育成に焦点がおかれ、質問応答が行われた。

最後に子ども読書普及事業が是非とも予算化され実現されるよう励ましの言葉があり閉会となった。

●「子どものつどい」盛況裏に終わる

恒例の子どものつどいが昨年12月18日に幼児・小学生1~3年を対象に県立図書館集会室において行

われた。絵本を影絵にした“かにむかし” “猫山”人形劇の“ねずみのよめいり”や映画等で楽しい一時を過ごした。悪天候にもかかわらず会場に入りきれないほどの人出であった。

